
邪神竜と賢者の楯

シロヤマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

邪神竜と賢者の楯

【Nコード】

N2065T

【作者名】

シロヤマ

【あらすじ】

邪神竜^{オス}の封印をしていた賢者ローテルセス（男）が倒れ、それによつて邪神竜が復活し世界は未曾有の大危機となる。－るはずだった騎士（男）×賢者（男 女に性転換） 邪神竜^{オス}の珍妙なラブコメ。ちなみに、『竜』とはくつつきません。（多分） 性転換ものです。が、カップリングは男×女です。

セント・リリエル学院の入院式

『中央都 セント・リリエル』にある、セント・リリエル魔法学院。

邪竜神を倒し封じた『賢者』も通っていたという、大陸随一の魔法学院だ。

正門から入って直ぐにある像は、邪竜神を倒し封印した賢者の像だ。若い青年が杖を掲げている。

1000年前に、大陸を脅かした邪神竜。

いまだに語り継がれ、そして『現在』の大陸の脅威となっている。

軽装の格好の一人の騎士の青年が、セント・リリエル学院の制服に身を包んだ少女の前に立つ。

金に近い茶色の髪を持ち、瞳は濃紺色だ。

「お時間です」

やや剣呑な目つきで少女を睨む。

その少女も負けじと騎士を睨む。怯むことのない騎士に悪態をつく少女。さらに騎士の視線はきつくなる。

（ふざけるな、こっちが睨みたい気分だって言うのに！！）

心の中で怒鳴る少女に、騎士はくいつと顎を動かす。

動かした先は同じ制服を着た入学院生たちが集まる一団だ。

少女はげんなりとして騎士を再び睨む。

騎士は少女のお目付け いや、『監視役』として共に居た。

(忌々しいっ!!)

少女はぎりぎりと歯を食いしばって学院生の一団に足を向けた。
少女の柔らかな新緑色の髪がふわりと揺れ、大きな紫の瞳はただただうんざりと周囲を見ていた。

「新入生の皆さん、講堂へ案内します」

一人の上級生が声を張り上げていた。

桃色にも似た金色のウェーブのかかった長い髪が揺れる。瞳は緑色。制服のタイも学年が異なるため、一年生の薄紫色と違う二年生の薄桃色だ。

「さあ、いきましょう、『シアルシア』様」

騎士はその名を強調するかのように、少女 シアルシアに告げる。
シアルシアは苦虫をかみつぶしたように顔をゆがめた。

「……………」

(くっ、この騎士っ！わかってやってるところが腹が立つ！！魔力が戻った暁には速攻で、蛙にしてやるっ。あのネジ抜け王女と一緒に実験体にしてやる！！！)

シアルシアの心中は怒りに荒れており、ピリピリとした雰囲気を出していた。

一言で言うと、触るな、危険。だ。

だが、騎士は素知らぬ顔で言う。

「まさかと思いますが、王女に対して不穏な考えを持っているようでしたら たとえ『シアルシア』様といえども、容赦いたしません。」

いや、内心シアルシアがどう思っているか騎士にはわかるのだろう。だからこそ、釘をさす。

「はっ。そうか。そのときは楽しみにしているよ、騎士・士・様！」
容赦しない？はっ！と、鼻で笑うシアルシアに騎士は不快だとはつきりと表情にあわらず。

「何度も言いますが、私にはロベルトという」

「すみません！」

騎士 ロベルトの言葉を遮り、上級生が困った顔をして近づいてくる。

ふと、周囲を見回すと同じ生徒たちがこそこそと囁き合っている。

（なんだ？）

こそこそと囁き合っている生徒たちに視線を向けた。

（くそつ。力が万全なら、風の魔法を使つて『声』を私の耳に運ばせるのにつ）

力を失っているシアルシアは生徒たちの異物を見るかのような視線が気に入らない。

いや、むしろ 懐かしいのだが…。

「なにか？」

ロベルトが上級生を見る というか睨む。

「……騎士、さまですね。彼女の付き人でしょうか？」

一瞬ひるんだ上級生は、ちらりとシアルシルに視線を向けた

「そうです」

「…お付きの方は保護者の席になっっています。あちらの扉から席についてください」

「お断りします」

「……即答かよ」

ロベルトと上級生のやり取りを見ていたシアルシアが毒づき、上級

生が息をのむ。

「申し訳ございません。我が主より、『シアルシア』様の御身を護るよう」

「はいはいはい！……！ロベルト、お前邪魔だから！邪魔だから！迷惑だから！消えろ！」

ロベルトの言葉を遮り、シアルシアは声を張り上げて消えろと連呼する。

目元がピクリと動き、こめかみに青筋が浮いているが気にせず、頼むから消えろ！とロベルトの身体を力いっぱい両手で押す。

その両手をロベルトにからめ捕られ、万歳をするかのように上にあげられる。なんとも間抜けな格好となり、

「『シアルシア』様のお側を離れることは私には許されておりません」

「私が許す。消えろ」

「はっ」

ロベルトは鼻で笑った。

（ここここ！こいつ~~~~~！！！！）

怒り任せてロベルトに掴みかかるうとすると、

「……ロベルト、様……。あの、こう言ってしまうて恐れ多いのです」
が……」

シアルシアに手を向け無言で止め、ロベルトに向かいその目をまっすぐ見て言葉を吐く。

「彼女はこのセント・リリエル学院の一学生となられたのです。お家のこともあります。『ここ』ではただの一学生なのです」
もつともな言葉に無言でロベルトは上級生を見る。

（おお？ ネジ抜け王女の犬が黙った。）

間抜けな万歳の格好で、黙ったロベルトを下から見上げる。

何とも無様な表情だ。年下の子供に正論を解かれたのだから。

「存じております。しかし」

「講堂には、セント・リリエル学院の先生方がそろっておられます。彼女に害あるものはおりません。それでもご心配なら剣を捨てて杖を取り、学生服を着ていただけますか？」

「……わかりました」

上級生の言葉にロベルトはシアルシアの手を離した。

(……………)

シアルシアは上級生の少女を目を見開いて見つめる。

(す、すごい…。いや、剣を捨てて杖を持て、なんて。…普通、騎士に言うか?!)

だが、それもまた正論。

共に居たいというのならば、だ。

「では、保護者の方はあちらの通路になります。大丈夫です。この短時間で彼女に鬼気迫ったことはありません」

ほっと息をつく少女と、

「……………。では、シアルシア様、『なにも』なさらぬよう」

苦虫噛み潰したような顔のロベルト。

そして、笑みを浮かべるシアルシア。

(なんだろう、このもやもやした胸のう치가スカツとしたのは…！
気分が良い！)

保護者の席に向かうロベルトの背を見ながら、ガッツポーズをとるシアルシア。そして、同じくロベルトの背を見ながら息をつく、上級生の少女。

「…ふう…」

実際、無礼な言い分で逆上した騎士手打ちにされるかも…と怯えていた少女はうつすらと汗ばんだ額に手を置く。
そんな少女にシアルシアは飛びついた。

「ありがとう！ありがとう！！感極まった！まずい、泣きそうっ…。
ありがとう~~~~！！」

「え？ええ？！」

戸惑う少女にシアルシアは感謝の言葉を述べる。

「追い払ってくれてありがとう！マジで！」

「……え…えっと…、まあ。お家のことで色々ある人が多いから…」
苦笑いを浮かべる少女に、シアルシアは笑いながら言った。

「私は……シアと呼んでくれ」

「ふふ。私は、ミリア。ミリア・ローテス。貴女の一つ上の学年よ。
よろしくね」

桃色に似た金の髪が揺れる。

ミリアの名を口の中で何度か呼び、

「ミリア…良い名前だな。次もぜひとも、ロベルトをぎゃふんと言
わせてくれ！」

ミリアの手をぎゅっと握ると、

「ちょっと！あなた！」

キンキンした声がシアルシアの耳を打つのと同時に、ミリアとシア
ルシアの間に割り込み握っていた手を無理やり解かれた。

「あ？」

「ミリアお姉さまに失礼ではなくて？！」

「は？」

現れた少女は、シアルシアと同じ入学院生。

琥珀色の釣り目と、薄紫色の縦ロールの髪。そして

「セシリアさん、まってっ」

「上級生を呼び捨てなんて…、しかも貴女の言葉遣い……っ。よく
もまあ、このセント・リリエル学院に入学できた」

「………なんつーでっかいリボンっ。ありえない……。」

目の前の女子生徒 セシリアの頭に数多の3倍あるリボンがのつ
てる。

「いや、ありえないだろ……。ファッショ的に……。田舎もの呼ばわ
りされても、都の服装的にどうよ、

その、あたま……っ」

笑うべきか、引くべきかで奇妙な顔つきになったシアルシアに少女
セシリアは絶句した。

「……こ、このリボンの良さがわからないなんて、どんな田舎から来
られたかのかしら?!」

顔を赤くして喰ってかかるセシリアにシアルシアは悪気なく告げる。
「別に田舎でも都でも、そのリボンの良さは分らないと思うが?」

「!!!!!!……?!?!?!」

どんつとセシリアの頭から湯気のようなものが立ちあがり、彼女はわ
なわなと震えだす。

その様子を見ていたミリアが慌てて二人の間に入りミリアの肩を掴
む。

「そ、それでは!!!!皆さんっ講堂へ向かいましょう!?!」

「っ!?!」

「セシリア、貴女のリボン。今日も似合っているわ」

「ミ、ミリアお姉様っ」

その言葉に、怒りがかき消され、ぼつと顔を赤くしてうるんだ目で
ミリアを見つめた。

そんな二人を見ながら、シアルシアは「良さのわからない私が悪い
のか?」と小さくぼやく。

セシリアと微かに視線が合ったとたん、セシリアに睨みつけられた。

「私が悪いのかよ……っ」

毒づきながらも移動を始めた一団に混じって移動を始めた。

（微かに私の周りが空いているのは、関わるべからず…という事な
んだろうなあ…）

入学式に保護者が席同伴なんて、どれだけの変わり者なのか　周
囲の目線がそう告げている。

それとは別の何かもありそうだが…。

（関わらない方が身のため…か…）

「君、どんな田舎から来たのさ」

「？」

突如声をかけられ、シアルシアは左側を歩く少年を見た。

灰青色の短髪に、紫紺の瞳。顔は端正、と言えば聞こえはいいのか
もしれないが、あまりシアルシアの好きな顔つきでない。

そう、言葉にすれば、こう言った顔は腹に何か含んでいる。

「あれはこの魔法使いの『都』カールセンの筆頭魔法使いのお嬢様
だよ。『場所』が『国』なら、お姫様さ」

前を歩く、いやでも目につくりボンの塊。

「…………ふむ。ハーデルス家か…」

シアルシアは口の中でその家名を吟味する。

魔法使いの『都』の筆頭魔法使いの娘を怒らせたのなら、確かに関
わらない方が身のためだろう。どのような火の粉が降りかかるか分
からないから。

少年がシアルシアの言葉に目を細め、口元に笑みの形を描く。

「…ふーん…」

「…なんだ？なにか言いたげだな…」

「いや、君と仲良く出来たらな、と思っただけさ…」

その言葉にシアルシアは舌打ちをした。

「いや、そんな目で見ないでくれよ、シアルシア」

「お前に名乗った覚えはないが？」

気易く名を呼ぶ少年にシアルシアは睨む。だが、その視線を軽くかわし笑いながら少年が言う。

「さっきの騎士様が言ってたじゃないか。シアルシア様って。あと、僕の名前は『お前』じゃなくて、ギルフ。ギルフ・レイザス、だ。よろしく」

差し出された手を、…さて、どうするか。

手の平を見つめ、

「小うるさい騎士様が知らない男と握手するな、と。あと、手を差し出すことも許されてない」

レイザスという名に聞き覚えがない。

特に親しくしても問題はないだろうが　この、腹に何かありそうな男と仲良くするつもりもない。

なので、シアルシアはロベルトの小言を少年　ギルフに教えた。

「へえ！そんなこと気にするようには見えなかったけど、君がね」
シアルシアの態度に笑いながらギルフは彼女に手を振り、「じゃあ、また」と言葉を落とし生徒たちの環に戻る。

生徒たちの環にいても簡単に入ったギルフは多分シアルシアと何を話したのか聞かれているのだろう。

移動する生徒たちのざわめきと微かなギルフの笑い声が聞こえる。

シアルシアは早々に生徒の環から外れたようだった。

それは一年前の…

「それでは、第1789回セント・リリエル魔法学院、入学式を行います」

講堂には、セント・リリエル魔法学院全生徒とそして魔法学院に連なる要人たちの代理人たちがいる。

代理人の中には魔法学院を援助する各国の王侯貴族、魔法使いたちの名もちらほらと伺える。

「祝辞」

代理人すら立てなかった要人たちが送った祝辞を淡々と読み上げる教師。

（ふうん…）

シアルシアは周囲に視線のみ動かしながら生徒たちの顔ぶれを見た。力が『無く』とも、魔力に対する感覚は衰えてないようで、一通りこの『講堂内』の魔力を感じ取った。

（この生徒たちの中で一番の魔力は、あの『男子生徒』ギルフか…。教師人の中では…、あのジジイは例外として…。あの教師、か）

数ある式辞を読み上げる、白髪交じりの壮年の男。黒を基調とした灰色のローブに編みこまれた僅かに目に留まる 儀式文字。

（……儀式魔法の使い手か…）

相手にするには厄介かもしれないな…。

物騒なことを考えながらも、シアルシアは自分の身に降りかかった

あの日の出来事を思い出す。

この日を迎える、そう、1年ほど前の あの絶望を…。

シアルシアとは偽名だ。

その前は、シルヴァルト・ローセルテスと名乗っていた。
シルヴァルト、そう、誰が聞いても男の名だ。

一年まで、シアルシアは、男だった。

東の森　キルオードに賢者の塔というものがあつた。

その賢者の塔には、一人の賢者がいた。

1000年前に大陸を救った英雄にして、世界をどこまでも愛した
一人の男。

世界こそ、妻！と言って過言ではない、言うならば世捨て人の男だ
つた。

神と契約し、1000年の間、世界に災いをもたらす邪神竜を封印
し続けた。

と言われていたが、実際は違う。

男は魔力をあらゆる『方向』から補間しただけのただの人だった。
特に世界愛に満ちていて慈愛のあふれる人物でもなかった。

邪神竜の封印はすなわち己の安寧の為の行いだった。

長い時の中、人の身体は朽ち果てる寸前　老体で　魔力と眠り
で補い、人としての意識も朦朧としていた。

気を抜けば、ぽっくりと死んでしまってもおかしくない。

そう、気を抜けば、だ。

1000年の封印に耐え続けた老人の身体はすでに限界に来ていた。
ある日、老人　シルヴァルトは　すっかり封印の儀式の最中に
『居眠り』をしてしまった。

結果は見えていた。

あっという間に封印は紐解かれ、邪神竜という災いが現れた。

邪神竜ベルデウィウス。

漆黒の竜。

シルヴァルトは二度と会いたくない存在だった。

あの竜と再び邂逅するのならば、いつそ、殺してくれと叫びたかった。

ベルデウィウスは朦朧とするシルヴァルトを見て、嘆いた。

『なんという事だ…っ！！こんな変わり果て姿になり……我が

』

そこからは思い出すのも気持ちが悪い。

シアルシアは頭を数回振りかぶる。

耳に残る、あの声。

そして、

『我が ……やり直すのだ、初めから

』

あろうことが、死にかけてたシルヴァルトを『若返らせた』上に、『女』に変えたのだ。

気がついたら、極秘裏に動いていた西の王国アナルテの『巫女姫』たる王女エルセルのロベルト率いる騎士たちが塔を徘徊していた。一言文句を言おうとして己の身体を見たシルヴァルトは絶叫した。

あり得ないくらいに錯乱した。

身体は女なっている上に、衣服はどう考えても『乱暴』されたように乱れていた。駆けられていた騎士衣の上着を投げ飛ばし、塔の窓から自殺をしようとしたところ、ロベルトに引きずられて「賢者の居所を知る唯一の人物」としてアナルテ城に連行された。

初めの三ヶ月は賢者シルヴァルト・ローセルテスだと信じてもらえず、延々と繰り返される尋問。

そして、女性の体の神秘たる月経にひと月の1週間ほどなされる日々。

セント・リリエル魔法学院の学院長ベルドル・デルザをこれまた極秘裏に呼びつけ人物確認をされたのち、賢者『シルヴァルト・ローセルテス』として半信半疑で信じてもらえた。

だが、賢者としての力はなく邪神竜の封印も解かれた。世界を危機的状況に陥れた落とし前をどうするつもりだ、と問われたシルヴァルトはこう答えた。

「は？何故、私が邪神竜を再封印しなければならない？解かれたのなら解かれたでお前らがどうにかすればいいだろう。私はもう疲れた、この生を終わらせたい…」

なので、私は今すぐに死にたいんだが？と、半眼でエルセルの手の者たちに告げた。その後は世界に対する無責任だの罵詈雑言の言い争い。『巫女姫』たる王女に火の粉が飛べば、最終的にロベルトとシルヴァルトが中心となり王女の耳に聞こえても良い『巧みな罵り合いが始まった。(それに気を使っていたのはロベルトのみで、シルヴァルトは口汚かった…)その二人の争いを静めた者が、ベルドルだった。

ベルドルは、現状では邪神竜を倒すことも封印することもできないとし、新たな守護者を探すことを求めた。事実上、シルヴァルトのお払い箱宣言だった。

気を悪くするもなく、シルヴァルトはどうぞどうぞご勝手にとその場を去るうとしたところ、

「賢者ローセルテス様、貴方様しか邪神竜の弱点を知らぬのです。これから邪神竜を倒し封印する新たなこの世界の守護者に知恵を授けてくれないでしょうか？」

あり得ないと全力拒否をしたシルヴァルトにベルドルはにこやかに、

「皆の者！賢者ローセルテス様は快く承知くださいました！以上、解散！！！」

と……。

その後、ベルドルの意向によりセント・リリエル魔法学院に入学し『守護者』たる資格を持つものを見つけ助言をする役目を押し付けられた。

その際に与えられた名前が、『シアルシア』。

シアルシア・センレーア、だ。

（あのくそじじい…）

ぎりつと齒を食いしばり、学院長席に座る老人　ベルドルを睨みつけた。

今のシルヴァルトは今期の入学院生の中でも中の下の魔力しかない。下手なことをすれば魔法学院の長たるベルドルに『縛られる』。

賢者として名を馳せたシルヴァルトにとっては屈辱でもあり、『縛られる』という事は、確実にあの『竜』と邂逅を果たすということ

になる。

あの、竜に^{トカゲ}！！！

しばらくして送られてきた祝辞が終わり、

「それではベルドル学院長より祝辞になります」

壇上に、セント・リリエル魔法学院『学院長』のベルドル・デルザが上がる。

「さて、わしが学院長のベルドル・デルザじゃ。皆も知っておるとおり、いま世界は未曾有の大危機が迫っておる。それは、一年前に怒ったレセルトの塔の崩壊じゃ」

「学院長！？」

祝辞を読みあげていた教師が驚きの声を上げる。

レセルトの塔　、世界の守護者たる賢者ローセルテスの塔の名前だ。

その塔の崩壊とはすなわち、賢者の死　邪神竜の復活。

教師はベルドルの言葉を遮るように何かを口に出そうとするが、ベルドルの言葉に遮られる。

「この学び舎で隠し事は無意味じゃ。魔法使いを統べる『都』より時機に通達されるであろう」

さらにと世界に危機が訪れていることを学院長がばらしたことにより、生徒や教師の間でもざわめきが止まらない。

風の噂で少しずつ浸透してきた、邪神竜の復活。

それを、この場で認めたのだ。

（ジジイは馬鹿だな）

学院長としての自分の首を絞めている。

どうという魂胆があるにしろ、真実は時に毒だ。

「……ター……塔……」

微かに誰かのつぶやきがシアルシアの耳を打つ。

（塔？セン・タールゼルドのことか？）

賢者の塔とは別に位置する魔法使いの『都』にある塔が『セン・タールゼルド』と呼ばれる塔だ。

声の主は、リボンが盛大に頭に盛られているセシリアだ。

「父上の言ったとおりだったのね……」

筆頭魔法使いの娘であるだけに、世界の状況はどうやら聞き及んでいたらしい。

その眼差しは　どこか焦りを含みながらも、真剣に世界を護りたいと思う者の目だ。

（……ふーん……）

シアルシアはセシリアを見つめながらも、世界に対する危機感というものは感じていなかった。

逆に、

（ジジイよ。大変なことになるぞ。後始末する教師が哀れだな……）

真実を告げた学院長ベルドルの立場を心配していた。

シアルシアの存在は、魔法使いの『都』には伏せられていた。

それは、魔法使いの『都』と対立をする『巫女姫』たるアナルテの王女がいたからだ。

南の魔法使いの『都』 - - カールセン。

北の公国　ロセルト。

東の森　キルオード。

西の王国　アナルテ。

四つの勢力が拮抗していたが、レセルトの塔の崩壊によりキルオー

ドは勢力争いより脱落。

現在は、カールセン、ロセルト、アナルテの2国、1都の争いだ。

その争いから中立を保つ地が、この『中央都 セント・リリエル』。
セント・リリエル魔法学院があるこの都だ。

ある意味、かつての賢者を匿うにはもってこいの場所だ。

「……………」

ちらりと保護者席のロベルトに視線を向けると、彼は引きつった顔でベルドルを見ていた。

保護者席の大人たちも、生徒たちも教師たちも、もうざわめきとまらない。

その中、ベルドルは静かに告げる。

「静まれ」

と。

途端、ざわめきが止まる。

魔力で静められたのだ。

「レセルトの塔 邪竜神を封印したかの賢者が死し、世界の『守護者』たる賢者の不在によって世界の数多のマナが導き手を失い混乱をきたしてある」

賢者とは、邪神竜の封印者という役目だけでなく、魔法を扱う者ながら誰もが身近に感じることでできる魔力マナの導き手でもある。

マナを一か所に滞ることなく、世界に満ちさせる役目。

それが、『賢者』。

その別称が、『守護者』。

シアルシアは何の感慨もなく、ベルドルの言葉を聞いていた。

「混乱が長引けば、マナの暴走を引き起こし世界はマナによって滅

ぼされる。新入生諸君、在校生諸君、君達はこの学院で知識と技術を学び、世界の防人たる一步を踏み出すことをわしは願っておる」この学院の生徒はいわば、将来の守護者になり得る人材であり、その期待を背負っていると告げると、静まっていた講堂に小さなざわめきが起こる。

「そして各機関と連結し、我々魔法使いは『邪竜神』再封印しなければならぬ。故に、セント・リリエルにおいては封印魔法の教科を必須としカリキュラムを行うものとした。戦闘魔法に突出してゐる生徒も、補助魔法に特化してゐる生徒も、必須科目として受けるように」

封印魔法――それはシアルシア・シルヴァルトが最も得意としていたものだった。

（知識はあるが、魔力はない……。これほど面白くないものはないな……）

小さくため息をついて、ベルドルが各教科の担当教師の名を告げる。

「『封印魔法』についてはファアラ教師が責任者となる」

白髪交じりの壮年の男・灰色のローブの教師が苦虫をつぶした顔をした。

どうやら、この教師がファアラらしい。

「……学院長……」

唐突に名指しされたのだろう。頭を抱えるファアラ。

どうやら、『封印魔法』の教師になることは初耳だったのだろう。

教師陣にも動揺が走る。

「新たな守護者が現れたその時、主ら若人はその守護者の支えになりえる存在じゃ。日々、魔法の鍛錬を怠ることなく精進せよ」

ベルドルは周囲の動揺を涼しい顔で受け流し、壇上から降りた。

ある騎士の一年前。の、一部。

壇上から降りるベルドルを苦い顔つきで見るロベルト。

事態をややこしくしてどうするつもりなのか？と内心悪態をつく。

そして、新緑色の髪の少女の背を捉えた。

何処から見ても、少女 女だ。

自分を賢者（男） と叫び暴れたその少女 シアルシアはどう見ても呆れていた。

当たり前だろう。

世界は、今危機的状況にあるのだから…。

ロベルトは天井を見上げ、講堂の内部を照らす灯り用の光石を見た。

太陽の日の光よりも白く、温かみの無い輝きだが 何処までも

白く染め上げる輝きがそこにはあった。

保護者や来賓の対応もあるのだろう。教師人たちは焦った顔つきで各々の役割を振り分け、生徒は教室に。来賓には説明を。

保護者は…。

（保護者、ですか…。俺が、保護者…）

騎士の家に生まれ、アテルナの『巫女姫』たる王女エルセルに仕えるために己を鍛えあげ、磨き上げたその騎士としての力^{すべて}を

己を賢者（男） だという得体のしれないだと言い張る少女に

『割り振られた』。

動き始めた生徒 シアルシアに付き添うため席を立ちあがった。

教師があわててロベルトに言葉を向けたが、有無を言わさず生徒の

輪の中から外れているシアルシアの後ろに立った。

その瞬間、シアルシアの嫌そうな顔が見てとれ、眉間にしわを寄せる。

もし、人生をやり直せるといふのならば、一年前のあの瞬間からやり直したい。

一年前、アテルナ王国騎士団団長室に呼ばれたロベルトは、騎士の長たるデイクス・ゼルダーの辞令をその耳で聞き、脳で理解し、目を大きく見開いて、そして言葉に出した。

「俺がそれを？」

騎士 ロベルトは露骨に嫌そうに顔を歪めた。

そう、露骨に、だ。

向かい合う騎士の男 デイクスは大きくため息をついた。

「エルセール王女の親衛隊への昇格が不満か？ロベルト」

「それに関しては全くございません！エルセール王女殿下にお仕えすることは騎士の誇りで、俺 私の目標でもあります！親衛隊の昇格を受けます！」

デイクスの言葉にロベルトは声を上げた。が、

（けど…）

その表情はすぐれなかった。

「ロベルト、お前の気持ちもわかる。エルセール王女をお守りするための親衛隊への昇格の為に並々ならぬ努力をしていたことも分かっている。これは――騎士団としての、いや、アナルテ王国、この世界の命運を分かち任務だ」

ディクスは瞼を閉じた。
そして、深く息を吐く。

「東の森の賢者ローセルテスの身柄を保護し、森に滞在し円滑に『封印』を継続できるよう助力せよ」

それが、我らがアテルナの『巫女姫』であるエルセール王女の御言葉だ。

ディクスの言葉がロベルトの身体に重くのしかかる。

助力せよ、という事、東の森に滞在せよ、という事だ。

（つまり、昇格早々…

…させん？左遷ですか…？）

助力とは、何だ？一介の騎士に助力はないだろう。助力は…。

人ならば魔法の力の源である『魔力』は持ちえる。だが、一般的な魔法使いを100の力で例えると、ロベルトは8ほどしか力がない。

珍しいほどの『魔法使い』としては絶望的に『なれない』ほどの魔力値である。

それを抜かしたとしても、ロベルトが助力足り得ない理由がある。その理由を知るディクスは眉間にしわを寄せ、力なく笑うロベルトに厳しい眼差しを向けた。

だが、ロベルトを選んだのは…王女エルセールだ。

逆に問うならば、こう聞きたい。そうディクスはぼんやりとしたロベルトを見ていた。

ロベルト、お前は一体何をしたんだ！？…と。

この話を聞いた時、ディクスは思わず王女に対して声をあげてし

まった。

ロベルトを東へ使わすことが理解できなかったのだ。

騎士として『は』優秀で、親衛隊にならずともいずれは騎士団の分隊の隊長に昇格は間違いないと考えていたのだから。

融通の利かない、私の強いロベルトのことだ。きつと、王女に不敬を働いたのだろう。やつめ、なんてことしくれたんだ！！

苦悩するデイクスに王女は微笑みながら告げた。

「彼のことはよく存じています。だから、彼が適任だとわたしは思いました」

存じている、ということとは、どういうことだ？

ロベルトが王女と繋がりがあるなど聞いたこともない。それはやはり不敬を働いた、ということか？

微笑む王女 エルセルはその美しい白金色の髪を風になびかせながらデイクスに告げる。

「彼は必ずやり遂げてくださいます」

そんなやり取りを知らぬロベルトはただ茫然としながらも、辞令を受け取り任務への準備を始めた。

辞令より2日後、ロベルトは騎士団長デイクスの選抜隊3名（デイクスの中では別名、ロベルト巻き添え隊）の隊長となり ロベルト達騎士達の足取り重く 、レセルトの塔へと赴いた。

そして、一同の目を疑うものがそこにはあった。

魔力で護られた、『賢者』にして『守護者』たるレセルトの塔が――
――朽ちていた。

レセルトの塔は白光の塔としてその、白の塔として有名だった。
事実、東の森キルオードはそれを名物にして大森林散策を観光とし

て収入を得ていたが、今、白の塔は、灰色の塔となり亀裂が走りところどころに黒い筋がはいっていた。

「…!？」

禍々しい気配が塔を包みあげていることに騎士たちは微かに悲鳴を上げ、ロベルトはまさか、と馬から降り単身塔内へと走る。

石でできた塔はいたるところに亀裂が走り、亀裂から紫色の得体の知れない煙が上がる。

塔の外観から見た黒い筋は亀裂に入った紫の煙だろう。

その煙はロベルトの肌に触れるとじゅわつと音を立てて皮膚が焼けるように傷んだ。

（これは…っ！これが瘴気というものかっ!？）

世界の命運 - - その言葉に乗せられた、まさかの - - ありえないと思っていたこと。

ただの左遷だと本気で思っていたロベルトは血の気が下がっていた。

『邪神竜』の復活。

1000年間、神と契約して封印してきた賢者の身体は既に限界に達していると言われた。

守護者の後継もなく、このままでは『危険』だと。

ロベルトは塔の階段を駆け上がり　悲鳴が聞こえた。

少女の声だ。

（!？　女の声？何故ここに!？）

この塔には賢者である老人ローセルテスしかいない。

悲鳴が聞こえた方へと駆け、僅かに開いていたかつては飴色だったと思われる錆色の扉を蹴破り、

「！！！！」

中で行われていた、『それ』を見た。

新緑色の髪が床に散らばり、白い四肢と思われるものが見て取れる。それは人間だろう。

薄汚れた布に絡まった状態ではつきりとは見れない　が、『その』黒いものはつきりと見て恐怖した。

蜥蜴人と思われる姿で目は金色。漆黒の身体はつややかに光り、口元からは赤い細い下がのぞく。

そして、蜥蜴人とは違う特徴として、背に生えたコウモリを思わせる皮膜の翼。

「じゃ、しんりゆう」

考えるよりも早く剣を抜き、人と思われるものに乗りかかっていた蜥蜴人（らしき）ものに斬りかかった。蜥蜴人は逃げるそぶりもせず、ロベルトの剣を右腕で受け止める。

ギンッと鋼がぶつかる音が響くが、鋼を持つものはロベルトのみ。蜥蜴人は受け止めた右腕を振りかぶり、咆哮した。

空気を震わせ、すべてを『咆哮』を正面から受けたロベルトはまるで何かに全身を殴られたかのように壁に叩きつけられた。

「ぐつつはあっ！！」

ぐらりと身体を床に倒し、痛みで歪む視界に蜥蜴人を捉えた。

その姿が変わる。

黒光りしていた鱗の肌は褐色の肌の男の裸体へ。羽は消え、黒の上等な布地のマントがなびき、黒い散りが黒衣となる。それと同時にばさりと長い漆黒の髪が現れ、その金色の瞳がロベルトを興

味深そうに見つめた。

「貴様、反魔力者か…」

「っ!？」

その言葉に息を飲み、よろよろとロベルトは立ちあがった。周囲の石畳と石壁には無残な爪痕があり、瘴気の煙を上げていた。その中で唯一、『無傷』のロベルトにさらに眼を細める。

反魔力。

すべての魔力を『拒絶』する。

攻撃の魔法でも、補助の魔法でも 癒しの魔法でも。そして、魔力を含むアイテムすらその効力を『拒絶』する。

「 邪神竜ベルデウィウスです、か…? 」

飛ばされても握りしめ離さなかった剣の先端を先ほどまで蜥蜴人だった者に向ける。

「ふ。その様に我を呼ぶ人間がいる」

微かに笑う男 ベルデウィウスは屈み、女を抱き上げた。

「!？ まて！ 賢者は ローセルテス様はどこだ!！」

その言葉に、ベルデウィウスの視線が険しくなる。

ロベルトに鋭い殺気を向けると、

「賢者など知らん 我が知っているのは、我が花嫁のみ」

「はな、よめ？」

口元を上げ、ベルデウィウスは笑う。抱きかかえていた者の腕がぶらんと垂れ下がり、

「我が子を産む者よ」

見せつけるように、新緑色の髪の娘　少女をロベルトに向けた。
青白い顔は苦悶の表情をわずかに残していたが、見て取れる限りでは　可憐な少女だ。

我が子を産む？

その言葉にロベルトはぞっとした。

邪神竜が生贄や乙女を欲しがるとは聞いたことはないが、目の前の男の金色の瞳にどこか狂喜が混じっている。あの少女をベルデウィウスに渡せばどうなるのか。

「……………」

剣を構えなおす。その様子を最高に面白いものを見たように、ベルデウィウスは顔を歪めて笑う。

そして、花嫁と言った少女を無造作に石畳の床に落とした。

「!？」

「ここは一旦引こう。我もまだ目覚めたばかりで完全ではない。反魔法者と戦うだけの牙も爪も　剣もない。この娘は私の『花嫁』、我以外、一筋たりとも傷はつけるな　人間」

ズンッと地面が縦揺れに数度揺れ、ロベルトはバランスを崩す。

それと同時にベルデウィウスは壁を破壊し、その身体を巨大な黒竜へと変化させ塔より飛び立った。

慌てて壁の穴に近づき、黒竜の飛び立った空を見上げると

黒竜らしきものは空には見て取れなかった。

邪神竜が復活してしまった。

そのことにどう対処しているのか、しばらく茫然としていると塔外に残してきた騎士たちの駆けあがる足音が聞き取れた。

騎士のひとりが真っ青な顔で竜がと叫ぶと、ロベルトは苦い顔つきでうなずく。

邪神竜が復活をした。

封印の助力のためにレセルトの塔まで赴いたのに　遅かった…。

倒れた少女の無残な姿を見て、ロベルトは上着を脱ぎ少女にかけた足の太股からわずかに血と思われる赤い筋を見つけ、ベルデウィウスという言葉が脳裏に浮かぶ。

花嫁。

子を産む。

騎士の何人かが塔内部を搜索し、賢者ローテスセスらしき人物の不在をロベルトに告げた。ロベルトは状況を報告するために一人の騎士にアナルテに駆けるよう伝え、わずかに身動きし身を起こした少女と目があつた。

「……………」

少女は険しい目つきで騎士たちを見まわし、数度頭を振りかぶり、「主ら…何を勝手にわしの塔へ立ち入っておる…」

腹が痛い…。

と低い声で呟き、腹部を抱えた。

そして、ぎよつと目を見開き己の手を見て、頭を抱えて長い髪を鷲掴みにし、胸をもみ上げ、股に手を入れた。

そして、股から手を抜き、べつとりと付いた赤い　血に　、

「ぎゃー――」

「……………」

絶叫した。

「な、なんじゃこりゃ――――――――――
――！？」

少女らしからぬ言葉使いに、赤く染まった手で胸をつかみ、

「むね？胸がある？！むね――――――――――え！
？」

身体に掛っていたロベルトの上着を丸めて叩きつけ、

「股にアレがない！？ 血、血だと？！ ……わしは、……あああ」

股に再度手を入れあるべきものを探すが無い。温かさを含む血に、
青白い顔がさらに青くなり 白くなる。

ロベルトたち騎士は少女の言動に啞然としながらも、どう答えてよ
いかわからずうつろたえた。

現状からみて、少女にとって いや女性にとっては最悪の出来事
があつたと思われたからだ。

純潔を奪われた、という。

「あの竜か！？あの竜かあ！……！！……？？」
トカゲ トカゲ

絶叫し、向かうは窓。

窓を開け放し、窓枠に足をかけた。そして慌ててロベルトは少女の
腰に腕を回し窓から引きずり下ろす。

「離せ！！離せ！！離せ！！離せ！！離せえ！！……無礼者！！！」

「何をしよう！」

「落ちようとしているだけじゃ……！」

「落ち？！ この高さから落ちれば怪我じゃすまない！」

「馬鹿か主は！死ぬために落ちるんだ！死なせろ！！……死なせて

くね！！！わしは死にたいんじや――――

もがく少女を羽交い絞めにし、太股を汚す赤い血に顔をゆがめる。乱暴されたことによる恐慌状態。

ロベルトは少女のために……死なせてやったほうがいいのかもしれないなどと一瞬考えた。

だが、

「賢者ローセルテス様の手がかりとして、死なせるわけには
いかない。」

魔法学院の芸術的な庭に視線を向け、ロベルトは皮肉気に笑う。

あの時、手を離していれば……。

いや、昇格を受けていなければ……。

ぼんやりと空を漂う白い雲を、ロベルトは見た。

「……以上。これが私、メルソフィ教室の説明になります。」

みなさん、3年間宜しくお願いしますね。」

のんびりとした口調の女声に意識を戻される。

振り分けられた教室にシアルシアを追つてついて来たはいいが、魔法学院の授業の説明から受け持ち教科の担当教師の説明、寮生活のものとなつてないもの。学院規則など、色々な説明を左から右へと聞き流していたロベルトはふとシアルシアの背を見つめる。

シアルシアは窓側の一番後ろ。つまり、ロベルトもシアルシアの後ろに待機することができた。そして、教室を見渡せる位置に居る。

壇上に立つ担任の魔法女教師　メルソフィは眼鏡の弦を持ち上げて微笑む。

赤みを帯びた茶色の髪をポニテールに結び上げ、切れ長な瞳は白金色を思わせる薄茶色。

露出の多い濃紺色のローブと、マントを身につけているが、漂う色香は『毒』を思わせる。数人の男子生徒は目のやりどころに困り視線を机の上に落としている。それ以外はその豊満な胸に頬を染めている。

ロベルトは露骨に眉間にしわを寄せた。

魔法使いと言うよりも、色魔のような魔女という方が言葉に合っているだろう。

ねっとりとした視線が気持ち悪い。それは、騎士としての道德意識がそうさせるのだろう。

多分、この女性とは気が合わない。

個人的女性の趣味を上げるならば、淑やかな女性がいい。

まして、男を誘惑するような恰好する女や、自分を男だの何だのいう女はもってのほかだ。

「ではでは、……………え……………。シアルシア・センレーアさん、とその保護者の方にすこーしお話があります……………」

その言葉に、ロベルトはシアルシアの背から視線をメルソフィに向けた。

微笑みを浮かべる、その薄茶色の瞳の奥が、黒く歪んでいるように見え、ぞわりと悪寒が走った。

彼と彼女とたぶん複雑な事情　くくく

別室に移動し、こつてりと女教師メルソフィに絞られた二人。

女教師いわく、ロベルトが教室内に居ると学生の気がそがれると言う事。（当たり前だが）

学校内ならシアルシアに危険が及ぶことはないという事。（入学院式にも言われていたが）

ロベルトも士官学校を出ているのならわかるだろう、と諭した上で授業中は教室に入らないことで決着がついた。

シアルシアはほつとし、ロベルトは憮然としたままの表情で学院の庭を歩いていた。

シアルシアは1000年前と変わらない学院に小さく息をつく。

広い芝生を見ながらそわそわし始めた。

日も傾きかけ、学生寮へ帰る生徒たちを視線の端に捕えた。本来ならば学生は寮生として学院内の寮で生活を義務付けられていたが、ロベルトがいるために寮生活は却下されたのだ。アナルテ王国これもまたひと悶着があつたのだが…。

（監視から少しでも逃れる時間ができたことは良かった…）

息をつくシアルシアにロベルトはつぶやいた。

「ところで賢者様候補はいらっしゃいましたか？」

「……、微妙だな…。魔力の高い教師と生徒がいたが…。魔力の高さは修練によつて何処までも磨き上げることができるからな。化けるとしたら、授業が始まった半年後くらいだろう」

その言葉に肩をすくめて返すとロベルトはそうですか。と短く返事を返した。

「賢者様が早く見つければ、この様な面倒事はないんですがね…」

「わかつている。私、わしは一刻も早く自由を手にあの世へ旅立つのだ！」

ぐつと拳に力を入れた。そんなシアルシアを呆れた眼差しで見下ろしているロベルト。

出会ってから幾度となく『死にたい、死なせる』という少女がどこまで『死』に対して本気なのか　レセルトの塔での叫び声以外ではただの冗談のようにしか聞こえない。

「賢者候補を探し出し、賢者として育て、賢者として邪神竜を封印する手助けをする。わしに課せられた役目として嫌々ながら務めを果たす。よいか、主は学生ではない。あまり魔法関連に首を突っ込むなよ。痛い目にあうぞ」

気合を入れつつ、ロベルトにくぎを刺す。

ロベルトはやれやれと首を振り、

「貴女が関わらなければ私はただの騎士…従者です。エルセール様のお心に添わぬことは致しません」

「エルセール、様ねえ」

ロベルトの言葉尻を捕え、口元を吊り上げる。

その表情にロベルトは眉を跳ねあげた。

「まあよい。人の傷を塩を塗りたくってぐりぐりとえぐる真似はせんよ。わしは基本、傷口を広げて塩を埋めることはするがな」

にやりと含みを持った笑いをロベルトに向けた。

それに対しロベルトも笑顔を向けた。こめかみには青筋が浮き出ていたが。

「すばらしいですね。ええ、性格が、最悪ですよ」

「気色悪い敬語を使う『騎士』がいると気分が腐るんでな。わしの娯楽はこんなことくらいじゃ」

「それはそうと、大体なんですかその言葉使いは。何のために学院に入学する前に淑女教育を行ったと思っっているんですか？」

年寄り臭い喋り方のシアルシアに、教育係りを受け持ったエルセールの乳母である女性の罵声を思い出した。

厳格そうに見え、実は気さくな女性で、『男まさりなおてんば』なシアルシアの教育を受け持つことになった。彼女の口癖と言えば、こうだ。

『あああつ。塔などという密閉された場所にいらつしやったからこの様なお可哀そうなことに！ご自分が女性であるという事をわかつてらつしやらないのね…。大丈夫です。お嬢様。わたしがお嬢様を立派なレディにして差し上げます！』

と、きらめく銀の櫛を持ってシアルシアに襲いかかっていた。彼女の努力はセント・リリエル学院に入学した途端崩れ落ちたようだ。

「ちよつ！主！今、誰を思い浮かべた！！」

青ざめたシアルシアがロベルトの右腕に飛びつく。顔には冷や汗が数滴付いている。

かなり動揺しているシアルシアに思考を戻し、ロベルトは『満面』の笑顔を向けた。

「さあ誰でしょうか？もしかしたら今シアルシア様が思っでいらつしやる方かもしれませんね。ああそうだ、その方にシアルシア様のいかに淑女らしからぬ言動を取っでいらつしやるか手紙を書くのも良いですねちょうど学業中は暇になりましたから。ナイスタイミングです！」

早口で言われた言葉にシアルシアは呻く。

「…………、わしは、じゃなかった…私は、…………とりあえずリリーアさんに告げないでください…でと、お願いします…」

しどろもどろで蒼い顔で言う彼女にロベルトは半眼で見つめる。

「いいませんよ。怒られるのは一蓮托生でしょう」

少なくとも、彼女 リリーアはシアルシアだけを怒りはしない。シ

アルシアの護衛もとい、監視のロベルトにもきつくお小言を向ける。
いわく、

『ロベルト様！ロベルト様が付いていながらなんということでしょう！』

（私は教育係りでも、子守でもない！！）
と口が裂けても言えないのだが…。

「！？」

心底呆れた言葉をシアルシアに投げるとシアルシアは思わずロベルトの脛を力いっぱい蹴った。

「うぐっ！？」

痛みで身を前かがみにするロベルトの髪の毛を掴み、

「小僧……」。言っていることと悪ことがあるという事を知っているか？」

恨みのこもった眼差しと声を向けた。

髪を引っ張られながらも頭皮痛みをこらへ、

「……っ、：口より先に手が出るのは淑女としてどうかと思いません、よつつと！」

髪の毛を掴んでいたシアルシアの手首を素早く捻り上げ、

「！？ いったたたたたたた！……！」

痛みで声に上げる彼女に、

「痛みは痛みで返ってきますよ、『シアルシア』様」

そう告げると手を離す。話された瞬間、バランスを崩し、たたらを踏みながら芝生の地面に尻もちをついた。

「ううぐぐぐう……！！」

芝生とぶちつと抜いてロベルトに投げつけるが、ロベルトは僅かに動いてそれをよけ、

「いい年した大人の『男』がなに子供みたいな事してるんです…」
毒づく、「うるさい！うるさいうるさー！い！」とシアルシアが喚き散らした。

「おぬ、お前とて『男』ならば理解できるだろう！1000年男として生きてきたというのに、『女』として生きるという！リリアというあの王女の乳母は最悪だ！わかるか、身ぐるみはがされて得体の知れない薬を塗りたくられて泥みたいなので身体を洗われて、しまいには髪の毛にぬるぬるとした得体の知れないものを付けたんだぞ！その後も爪にクリームを塗ったりとか顔に白い粉をつけたりとかっ」

一番きつかったのは、コルセットというやつだ。

日が傾きかけた空をシアルシアは遠い目で見つめた。

「……中身が出ると思った…んだぞ！」

「ああ、そういう風に聞きますけど、腰が細いのが流行ですし？女性ならば仕方ないんじゃないですか？」

仕方ない？で、

「すむかー！ー！ー！ー！」

ごろごろと芝生の上を転がりまわる。

「……『シアルシア』様……」

「うつつ、1000年『男』として生きてきたわしのプライドがズタボロじゃ…」

「その前に、今の状況をしっかりと把握していただきたいですね、制服がめくれて下着が見えます」

薄紫色のマントとその下には黒の半袖のシャツ、紺色のベスト、紺をベースとしたチェックの柄のスカート。魔法学院なら黒いローブを考えていたロベルトは制服を見てどこの貴族学校だと心中毒づいたのを覚えている。どうやら、制服可愛くなーい！といった女教師陣と女子生徒陣+制服マニアな男子陣で作られた魔法防御服らしい。その防御をいかに無駄にしているかが、女子生徒の服だ。

ひざ丈上10センチのスカートから覗く足は、防御不可能だ。逆に

言うと思春期の男子に別の意味の攻撃ができるだろう。

シアルシアは身を起こし惜しげもなく投げ出された足を見る。

「ふ、パンツの一枚二枚みられたところで私は痛くも痒くもないな」

「リリーア様にそう手紙を」

「痛い！とつても痛い！そして恥ずかしい！！」

瞬時に立ち上がり、制服についた草を払う。

「そう思うなら、本当に子供みたいな真似はやめていただきたいも
のですね」

呆れた口調でつぶやいたロベルトにシアルシアは、広い芝生に視線
を向け、次にロベルトに向けた。

「お前はこう、広い庭を見ると駆けだしたくならないか？」

「アンタはこの犬だ、どこの！！」

思わずロベルトは『素』で叫んでしまった。

「犬！？お前！言う事かけて私を犬だと！！」

「犬ですよ犬！！大体、学院の敷地内で他の生徒の目もあるという
のに…いろんな意味で淑女教育のし直しを要求した方がいいかもし
れないですね…」

「ロベルト、明日の朝、朝日が見れるといいな…」

「見れますよ。手紙を書き終えたら」

「手紙を書き終えられたらいいな？」

笑いながら火花をひらす二人。

そんな二人のやり取りを遠目で一人の少年が見ていた。

栗色の色の短い髪が風に流れる。少年の焦げ茶色の目が、二人をじ
っと見つめる。

かなり険悪に見える。一触即発状態だろう。

「エリウス君？」

少年に声をかける一人の少女。

漆黒の長い髪を二つに縛り上げ、水色のリボンで飾っている。

瞳は青緑色の深い色合いを持っている。

「同じルドルフ教室の、マティアよ」

少女 マティアは大きな瞳をきらきらと輝かせてエリウスと呼んだ少年を見た。

「……………何か用か？」

「ううん？ただ、学院を散策してて見知った顔があったから…あれ？」

エリウスの視線をたどると、そこには一人の女子生徒と騎士が何かを言い合っていた。

確か、入院式で上級生と悶着していた二人だ。

そして、セシリア・ハーデルスと言い合いをしていた彼女だ。

魔法使いの『都』のハーデルスに睨まれた彼女のは、明日から大丈夫なのだろうか…。

暗い気持が押し寄せてきたが、二人のじゃれあいを見て口元がほころんだ。

不穏な雰囲気はなく、気心知れた付き合い方だとマティアは二人の駆け合う姿を見てくすりと笑う。

「仲がいいんだね」

「そう見えるのか？」

エリウスはマティアの目を見て問う。

アレを仲がいいと？

マティアは頷きながら微笑んだ。

「仲いいよ。だって、仲が良くないなら言葉も交わさないもの。だから、あんな風に喧嘩してるように見えて本当はずっと仲がいいんだと思うよ」

エリウスは手を握りしめ、短く「そうか…」と言葉をこぼした。どこか寂しそうであり 悲しそうであり…。

マティアは数度瞬きして、一瞬考えながらもエリウスに告げた。

「そうだ！今、あたし、学院を散策してるって言ったでしょ？一緒

に見て回ろつよ！門限まであと2時間あるし！ね！」

エリウスが答える前に手を取り、

「行こう！」

有無言わず　引きずっていた。

「お、おい！？」

「お次は由緒ある魔法陣の写本の棟です！」

慌てるエリウスにマティアは明るく目指す棟の紹介をした。

ロベルトは二人の生徒が仲良く手をつないで走っていく様を見て、青春だな…と小さくため息をつく。

そんなロベルトの視線を追うシアルシアは、楽しげに話す少女の声が聞こえたが既に姿は見えず、

「なんだ？」

「いえ、青春だな…と思ひまして」

「？　はあ？」

シアルシアはロベルトに対して間の抜けた声を上げた。

一方、彼ら二人の住まいとなる屋敷はアナルテ王国の領事館の一つ　紅華館。

花々に囲まれた美しい、城に匹敵するほどの広さの庭園を持つ館だ。そして、その広間。騎士の一人が悪態をつきながらも一人の騎士に何かを言つて、その場を去る。

もう一人の騎士は微かな笑いを浮かべて窓の外を覗く。

日は落ちる　だが、この館の客と騎士はまだ戻って来ていない。突拍子のないあの少女が何かやらしたのかそうでないのか…。

「トーヤ、アッサムのことは気にするな」

銀の髪の騎士は黒髪の騎士　トーヤに静かに言つ。

トーヤは笑いながら窓の外から視線を騎士に向け、

「あははは、気にしてなんかいないよ。アッサムはロベルトが心底気に入らないみたいだから、この任務で中央都に来たことが腹立たしいんだろっね。巻き添えくらったって感じで」

「……………」

「そういう、ジェルドもそうだよな。自分を賢者と言ったり男だっ言ったりする変わり者のお嬢様の護衛とか最悪だっと思ってるだろっし、そもそもお嬢様を『賢者ローセルテス』だと思ってないだろっ」

「……………そういうお前は…、いや…よそう」

ジェルドと呼ばれた騎士は、言葉を濁す。

「俺は面白いことが好きだから別にこの任務は嫌いじゃないし、ロベルト先輩も嫌いじゃないよ。たとえ
エルセール様に『忠誠なき騎士』だとしてもね」

その言葉にジェルドの視線が険しくなる。

『忠誠なき騎士』。

それはロベルトの蔑称だ。

「邪神竜の手下って強いと思います？」

ジェルドの視線をもつとせず、トーヤは話題を変えた。

「…伝承では、4人の魔族を従えていたと言われている」

「この一年でアナルテ王国に干渉した魔族はゼロ。復活と同時に手下が目覚めるってのはないみたいなのかな…？」

考え込むトーヤにジェルドは新緑色の髪を持つ少女の言葉を思い浮かべる。

『ヤツの手下？…………、そんなもの…』

「そのことに関しては、親衛隊隊長セシエル様が対応していらつしやる。何かあれば魔法伝書で連絡を下さる手はずになっている」

「手はず、ねえ…。親衛隊がロベルト先輩の『この』隊に、素直に

情報くれるといいけどね」

肩を透かしてトーヤは窓の外を見る。

馬車が止まり、中からロベルトが現れ、そして少女が現れる。

ロベルトが差し出した手を叩き、降りようとするとロベルトに何かを言われてしぶしぶ再度差し出された手を取る。

多分、リリーア様に言いつけますよ。と言われたのだろう。

そう思うと笑いがこみあげてくる。

喉を鳴らして笑うトーヤをいぶかしみ、ジェルドは窓の外を見た。

馬車から下りた少女 シアルシアがロベルトの手を叩き一人ですんずんと進む。

ロベルトは御者に何かを言いつけ、間を空けてシアルシアの後ろを歩く。

「さーて！お嬢様をお迎えしないとね」

笑いをこらえながら広間から出ていくトーヤの背をジェルドは見つめた。

『ヤツの手下？……、そんなもの、この『世界』そのものだろう？』

シアルシアの言葉が脳裏を過る。

「世界を相手に……」

彼女の言葉が正しければ、邪神竜の配下は『世界』となる。

世界を相手に、人類は 勝てるのか。

そう考え頭をふる。

おかしな娘の戯言だと聞きながせが良いのだが、状況は確実に彼女を『賢者ローセルテス』だと示している。

世界を相手にしていた賢者は力を失い、本来の姿も失った。

はたして、新たな賢者は見つかるのだろうか…。

彼と彼女とたぶん複雑な事情 ｝？｝

夕刻、屋敷へと戻って来たシアルシアは途端に不機嫌になる。

屋敷の使用人達の目に違和感がある。

昨日この屋敷に来たばかりの時とは、決定的に違う 目だ。

粗暴な娘が騎士に悪態をつく態度に目を丸くしていた使用人たちは、それでも『あからさまな』嫌悪感は感じなかった。

「お疲れ様です。お嬢様、先輩」

気さくな声と共に現れた騎士トーヤにシアルシアは視線で問うが、トーヤは気にしたそぶりもなく笑う。

さらりと柔らかな金色の髪が揺れる。着崩した騎士衣から覗く首本には、縄の様な火傷の痕が見れた。

本人はそれを隠すそぶりもせず、痕を見せる。

シアルシアは、トーヤの火傷の痕に言及した事はないが1000年もの間生きていれば何を思っただけ痕をさらしているのかぼんやりとだが予想はついた。

醜い痕に、自分と対した人間の反応を見ているのだ。

使用人たちが、その痕を直視出来ずに視線をそらす場面に何度か出会った、その都度思った。

（相変わらず、悪趣味なことだ）

呆れた眼差しでトーヤを見ると、トーヤは途端ニヤニヤと笑いだす。「どうでした初登校！」

反応が楽しくて仕方がないというトーヤにシアルシアは肩にかかった髪を払いながら、ふんつと息をついて言う。

「可もなく不可もなく」

「不可すぎるでしょう、『シアルシア』様」

「はっははは！明日からお前の眼がない事が嬉しいよ！私は！！」
ばかり、と火花が散る。

お互い笑いながらも、目が笑ってはいない。ロベルトにしてはこめかみに青筋を浮かべている。

もしもシアルシアが『賢者』とか、『重要人物』でなければ頭を鷲掴みにして振り回したいくらいの怒りを持っていたが、

「そのご性格でご友人ができればいいですね。『シアルシア』様」

「学業すら必要がないのに、友人など手に入れてどうする？意味などないだろう」

忌々しいと言ったふうに、ロベルトを睨みつけながら告げる。

「ご友人に意味などないと言っている時点で貴女の人となりが知れますねというか前から思っていましたでしたが根暗ですよね貴女は、ああ塔の中にこもっていたためにコミュニケーション能力が欠落しているんですねそれじゃあご友人など出来はしないですね」

ノンブレスではと鼻で笑って言うロベルトにシアルシアは引くついた笑みを浮かべる。

「私が万全ならば、お前は、今、ネズミになっていた」

「それは残念ですね」

微笑を返したロベルト。

二人の間で激しく火花が散る。その様子を、トーヤは背に冷や汗をかきながら見つめていた。

（相変わらず中が悪いんだか、いいんだか…）

彼、トーヤから見た二人は、必ずしも良好な関係ではない。

出会いも出会いだったが、その後の城でのやり取りも悪かった。

シアルシア いや、シルヴァルトは世界より何より自分の死を望み、ロベルトは王女エルセールの意思に従った。

エルセールの意思是、「邪神竜復活の阻止」。

けれど邪神竜は復活をしてしまった。ならば次の手は、再封印。

双方の頑なな意思が、真正面からぶつかり合う。

というか、罵り合う。

ロベルトにとって唯一の救いは、シルヴァルトが力をほとんど失っていること。

もしも、賢者としての力を保有していたら先程の言葉通り　ネズミとなっていただろう。

「えーっと、先輩！お嬢様、落ち着いて！」

声を上げたトーヤを二人に同時に睨みつける。

うつわーっと手の甲で額を拭いながら、

「えーっと、とりあえず、先輩の眼がないって、どういこと？」と、聞いた。

屋敷の中で一番質素な部屋にやってきた3人は中央のソファに向かい合うように座った。

トーヤが若い　シアルシアと（見た目）同年代の使用人の栗色の髪の少女に飲み物を頼む。

使用人の少女は了解し、そしてちらりとロベルトを見て　戸惑ったように　困ったように、顔をそむけた。

ロベルトは少女の態度を見て、小さくため息をついた。

（アッサムか…）

騎士学校時代も、騎士団の時も、何かと衝突をしてきたが…ロベルトと共に中央都の任務に付けられた事に腸が煮えくりかえって周囲に当たり散らしているらしい。

ジェルドが使用人に怒鳴っていた、と昨晚ロベルトに告げに来た時にどうにかしろ　そう言われていたが…。

（この分だと、親衛隊の新任の儀でのことも使用人たちに喋っているのだろうな）

使用人の態度から伺えるのは 嫌悪。
アテルナの王家に忠誠を誓う者たちのみがこの館には勤めている。
行儀見習い程度の使用人では、王家が滞在する館には相応しくないとされているためだ。
彼らの視線が、あの日の出来事を思い出させる。
悪夢と言える、あの日の出来事を…。

王女エルセルの親衛隊の一人となることを目指し　そして、
どんな任務であろうとも選ばれたからには　と意気込んだ。
たとえ、左遷であろうとも、と。

使用人の少女が紅茶の入ったカップを、シアルシア、トーヤ、ロベルトの順に置く。

ロベルトの前に差し出された時、微かに手が震えていた。

(『忠誠なき騎士』…か)

カップを受け取り、紅茶に映る己の顔を見た。

紅茶に映る水面の己は、波紋で揺らぎ歪んでいた。

「それで、一体どういう事ですか？ロベルト先輩」

使用人の少女が退室すると同時にトーヤが問う。事前の熱い紅茶を飲みながらロベルトの話を聞き、「あー」と呻くトーヤ。

「つまり、授業中は出入り禁止ってこと…？」

「そういう事になる」

「大丈夫なんですか？」

現在、邪神竜の配下の動きはない。

伝承で確認されている配下は4人。 - 魔族。

もし魔族の4人が現れた場合、邪神竜を封印をしていたシルヴァルト・ローセルテスと新たな賢者候補を狙う可能性がある。

邪神竜の弱みを握るローセルテスの護衛するために騎士が4人もいる

と言うのに　その騎士が一時側から離れることになる。

眉をひそめて問うトーヤにロベルトは額を手で押さえて、息をつく。大丈夫かと問われれば、大丈夫ではない。

現在の状態は、何もない手探りの状態だ。敵の襲撃もあるわけでもなく、かといって賢者候補がいるわけでもない。邪神竜の復活から1年あまり…。

事態は何ら進展を見せない　　良くも悪くも、だ。

この地にすむ人々の頼りの綱は、ローセルテスである『シアルシア』しかない。

それ以前に

「全力でシアルシア様をお守りするしか今のところ、『やることがない』」

「ぶふうっ…ゲフゴフ…うわっ！先輩身も蓋もない！！！」

紅茶を盛大に噴いたトーヤは咽ながらロベルトに叫んだ。ロベルトは汚いなあと噴きだされた紅茶出汚れたテーブルを見た。シアルシアは半眼でため息をついた。

「……………あほか…」

「うるさいですよ。『シアルシア』様？」

「大体、誰が護ってくれと言った、だ、れ、がっ」

紅茶をずっと飲むシアルシアに下品ですよ。と言うと、シアルシアは乱暴にカップをテーブルに置いた。

「大体、お前らはピリピリしすぎなんだ！邪神竜の阿呆が行ったのは『復元』の魔法を使っただ。良いか。復元の魔法は複雑で、魔力や生命力を大量に消費する。死にかけていた　むしろ死んでいた私の身体を己の生命力で『復元』させ、魔力で『固定』させた。簡単に言うと、干物に水を入れて水が触れないように撥水加工され

ストール

た魔法布でくるんだ状態がこの身体だ。カラツカラツの干物に封印が解かれた飢餓状態の爬虫類が己の生命力を入れたんだ。最低でも2年は動けないはずだ。そう『初めに言った』だろう」

つまり、2年は危険がない。と二人の騎士に老人言葉で言うシアルシアに、『初めて聞き及んだ事実』に二人の騎士は顔を見合わせた。『手下は？』

「…あの四バカ共が…」

トーヤの言葉にシアルシアは額を抑える。

「魔族とは名ばかりの『狂魔法使い』ル・ローウ」のさらに阿呆共だ。あんな阿呆共が策を巡らせたところで、この私の完璧で完全な魔法にかなうわけなどない」

「その『完璧で完全な魔法』と言うのを私たちは見たことが一度もないのですけどね。あるとすれば、大穴をあけた魔法とか、泉を凍らせた魔法とか」

「先輩、それみんなお嬢様のしつぱ」

「黙れ！小僧共！！」

怒鳴るシアルシアに呆れた眼差しを向け、ロベルトは肩をすくめた。「邪神竜との対決には猶予があり、手下の魔族は『動く』ことができる。ならば、我々がすべきことは『貴方』を護ることです　シ
ルヴァルト・ローセルテス様」

むつとした少女に、また無駄に言い合いが始まるのかとトーヤは苦笑いを浮かべて話題を変えた。

「あー、俺…。魔法関係からつきしなんで…。『狂魔法使い』ル・ローウ」ってなんですか？」

「トーヤ…」

思わず頭を抱えそうになったロベルトにトーヤは焦り、言い訳めいた言葉を言った。

「いや、だって！魔法の専門用語ってめんど　じゃなく、記憶に残らなくて…」

あたふたとロベルトにちよっぴり出た本音と、言いわけを並べる騎

士にシアルシアは息をついて言う。

「狂魔法使い《ル・ローウ》は一般的には邪道に落ちた魔法使いを差す。たとえるならば、贅を使って力を得た者の事を云う、ベルデウィウスの狂魔法使い《ル・ローウ》はそれとはまたちよつと違うのだが…」

小さく付けくわえられた、『違う』という言葉。

邪神竜ベルデウィウスに関する記述や伝承は少なく、彼らにつき従う狂魔法使い《ル・ローウ》の記述も無いに等しい。

唯一、知り得ている人物は 目の前の賢者のみ。

「ジェルドならこういうの得意なんだけど、俺は全く駄目で」

「覚える気がないんだろう？お前は」

呆れたふうにロベルトに言われると、照れ笑いを浮かべ、

「いやー、その通り！」

と胸を張る。

「そう言えば、ジェルドはどうした？」

ロベルトは本来ならば、出迎えているであろう部下を思い浮かべる。魔法に関する知識はメンバーの中では飛び抜けている。

魔法使いとなることを望みつつも、家の都合としかいない事情で騎士になり、一部ではどっちつかずと揶揄されている。

「……、アッサムのご機嫌とり？」

疑問形で答えるトーヤに、ロベルトとシアルシアはげっそりとした。「アッサムに関してはお前ら騎士がうまくまとめるとして、夕食の時間まで私は眠るよ」

席を立ち、肩にかかった新緑色の髪を払い、

「ではお部屋までお送りいたします」

当然のようにロベルトは席を立ち扉を開く。

シアルシアは無然としつつも、

「では、トーヤ」

ソファアでくつろぎながら紅茶を飲むトーヤに退室のあいさつをす

る。

ぱたりと扉が閉められ、室内に残されたトーヤは小さく息をつく。

（確かに、騎士の内輪もめは騎士同士でどうにかするべきだけどね……）

ロベルトとアッサムを思い浮かべ、

「どうにもならないだろうなあ……」

せめて、セント・リリエルに来る前にどうにかするべき問題だった。むしろ、アッサムが何故このメンバーに含まれているのが謎だった。

（団長、何考えてんですか……まったく）

セント・リリエル魔法学院、学院長室。

薄闇の中、一つの黒い影が重厚な飴色の扉の前にいた。

影と思わせる、漆黒の姿。

長い漆黒の髪に、同じ漆黒の瞳。

纏う衣服も上等な絹と一目で見えてわかる艶を持ち、そして施された魔法刺繍も美しく、知るもが見れば『とても』高価な刺繍だと一目でわかるだろう。

纏う服装だけで城三つほど容易く購入できる、それほど財を持つ存在。

鈍い音を立てて、飴色の扉がわずかに開き、

「やはり来たか、『邪神竜』よ」

ベルドルのやや枯れた声が響く。

静寂が支配する薄闇の中、カッンカッンと音が鳴る。

その音は、世界を汚すかのように響く。

「……………」

男はわずかに開いた扉から身を滑り込ませるように室内に入り込んだ。

「黒、伝承にある通りじゃな…」

ゆらりと窓辺に居たベルドルは、闇色の空に浮かぶ星をその眼で見

邪神竜ベルデウィウスへと視線を向ける。

ベルデウィウスは、くつと喉を鳴らし、

「伝承とは、人間の都合の良いように創られた御伽話。それに付き合うほど、我ら竜は愚かではない」

ぼうつと突如、室内にオレンジ色の炎が職台にともる。

「ならば、聞こうではないか　真実を、そして」

ベルドルは、ベルデウィウスに席を促す。

「　中央都セント・リリエルへ来訪した理由を」

彼と彼女とたぶん複雑な事情　くくく

セント・リリエル魔法学院の門を慌てながら走る、少女と騎士。
二人を注意する教師もいない。
なぜなら、

「初日早々に遅刻とはっ！もう少し早く起きてください！！」

「うるさい！！昨日はこのくらいに起きても充分間に合っただろう
！！だいたい！無駄に化粧水とかクリームとか髪の毛いじり回す使
用人が悪いんだろっが！」

「人のせいにするのはやめたほうがいいですよ『シアルシア』様！」

二人は喚きながら全力疾走である。

教師が止めようにも、声をかける間もなく走り抜ける二人の背をポ
カンと見るだけで終わる。

そもそも、シアルシアが寝坊したというのは事実ではない。

本人も、それ相応の身支度を済ませ朝食をとる予定だったが『昨日
まで居なかった』使用人^{メイド}が突然、化粧品とブラシなど持って現れた。

『おはようございます、お嬢様。私はリリーアの孫になります、リ
ースと申します。これからシアルシア

お嬢様のセント・リリエルでのご生活をお支えるため祖母とエル
セル様に仰せつかってまいりました』

シアルシアにとって、それは死刑宣告に等しかった。
リースの背後にいた使用人達がシアルシアを捕え、

『リボンが曲がっていますわ、お嬢様』

『リボンはレースにしましょう』

『あら、赤の方がいいわ』

『肌がおきれいですから薄い色のファンデーションにしましょう』

『口紅の色はどうしましょう』

『指先は』

『マニキュアはこの色がいいわ』

使用人たちの話から逃げたシアルシアに出会ったジェルドはシアルシアに憐みの視線（男が女になっただけでも苦痛なのに、女性に化粧を行使されることはさらに苦痛だという）を向け、襟首を捕えてリースに差しだした。

『！？』

絶句するシアルシアに騎士ジェルドは顔面蒼白、心底すまなさそうに告げる。

『すみません、お嬢様』

使用人たちに拘束されたシアルシアに背を向け、ジェルドは逃げて行った。

「私はこの1000年を振り返ったよ。なんで、ベルデウィウスを殺さずに封印したのか、と…。とりあえず、帰ったらジェルドはシめる。あの野郎…」

「邪神竜に関してはむしろそうしてくださっていたほうが世界の為でしたよ。ジェルドに関しては多分出会ったのがトーヤでも同じようにされたと思いますよ」

リースと使用人にもみくちやにされて、磨かれた薄化粧をしているシアルシアに並びながらも走るロベルトは己の心のまま告げる。

（それに…彼女はアッサムよりタチが悪い）

亜麻色長い髪を結いあげて、前髪から覗く、リースの褐色の瞳が射抜くようにロベルトを見る。

『忠誠なき騎士』と言われるロベルトを完全に敵視している目だ。リースが送り込まれてきた背景は、きつと親衛隊の『誰か』の思惑がある。

その思惑に心当たりがないところが厄介だ。

ロベルトは心中ため息をつく。

そして、昨日よりも艶やかに輝く新緑色の髪に視線が捕らわれる。せつかくきれいにしてもらったのに、全力疾走で乱れている。

残念に思い、ふと、犬のように広場で転げまわるシアルシアを思い浮かべた。

（無駄なことだよな）

どんなにきれいに着飾っても、本人がそれを維持しようとは思わない。まあ、元が男となればガサツと言うのは仕方がないが、少しは周囲と合わせることを覚えた方がいいと思う。彼（彼女）の尊大な態度がいづれトラブルを引き起こすはずだ。絶対、確実に。この一年で身にしまっているロベルトは以外に体力のあるシアルシアの背を見つめる。と、突然シアルシアが直角に曲がり、ロベルトが目をもくどこに行くつもりですか！と思わず叫びかけると、シアルシアが、こっちの方が早い！と教員室へと向かって行く。

セント・リリエル魔法学院は、学院の門を抜けると広場があり広場を囲むように建物がある。

門を後ろにし、建物を前にすると、正面が講堂・右側が教員室、左側が寮だ。

左側には寮生たちの居住施設があり、教員室側には教室寮と研究室がある。

講堂の裏手には中庭があり、中庭を囲むように生徒たちの教室がある。

教室の裏手には、実習用の広場グラウンドがあり魔法防御壁の術式を編みこま

れた煉瓦の壁が広場を囲うようにある。

学院全体は、魔法抗体を持つ針葉樹シルフィルムに囲まれていて、一種の魔法防御壁となっている。

これについては、学院生の魔法や、教員の中にいる魔法研究者ディーンの魔法の暴発が都市へと被害を及ぼさないためのものとされている。

「遠回りのような…」

「と、思わせて案外に近い」

にやりと笑い、外側から廊下の窓をそつと開ける。

始業前のクラスごとのミーティングがあるのか、廊下内部はしんと静まり返っていた。

窓枠に手をかけ、掛け声一つで飛び上り窓枠に吸い込まれるように建物内部に入り込んだシアルシアにロベルトは引きつった顔で告げる。

「ちよつ！ここは、教員寮でしょう」

「教員寮には、転移陣カートがある。あの、ただっ広い中庭を走る抜けるより良いんだよ。ほら、大声と物音立てるな、気づかれるだろう」こそこそと囁くシアルシアにロベルトは魔法に詳しくがないが、やっていることが道徳的に”褒められたことではない”ことはわかっている。

まず、一つ、教員寮に無断で侵入。

二つ、転移陣カートがどの様なものかわからないが、きっとオチはこうだろう。

無断使用、だろう。

「ちなみに、バレたらどうなるんですか？」

「私が以前通っていた『時期』なら、懲罰室行きだ」

「おひとりどうぞ。私は歩いて行きます」

「そのまま来なくていいぞ」

につこりと微笑むシアルシアの背後が煌めいたように感じる。

「……………」

無駄に化粧ってすごい。などと、ロベルトはため息をつく。

印象が変わった、と言うわけではなく、そう、少し手を入れただけで元男の賢者はとても可愛い女の子に見える。しつこいようだが、化粧ってすごい。

ロベルトは口が裂けても、死んでも可愛いなどとは口には出せないがそれ以前に、そもそも、

（男だろう、こいつは）

ガサツで、犬の様な部分があり、それでいて、無駄に短気。

シアルシアがロベルトを置いて廊下を足音を気にしながら歩く。

その背を見ながら、再びロベルトは盛大にため息をつき、窓枠に手をかけてひらりと舞い上がるように廊下へと飛び込んだ。

「貴女、早々に遅刻ですの」

甲高い声に、何処となく嫌悪が混じる。

顔の倍ある大きなリボンがゆっさゆっさと揺れる。

シアルシアは目をぱちくりとさせ、琥珀の釣りあげた眼差しで睨む女子生徒を見た。

「……………？」

「セシリア、セシリア・ハーデルスですわ！」

薄紫色の縦ロールの髪を乱しながら、女子生徒 セシリアは叫んだ。

「ああ、で？」

「で！？で、ですって！？」

ヒステリックに叫んだセシリアは、身体をわななさせる。

その様子をシアルシアはなんだこいつ。と言ったふうに我関せずと教室内の己の席を目指す。

ロベルトと共に、こっそりと転移陣^{カト}を使用し、大部時間を短縮はしたが授業には遅れてしまった。ここは私がメルソフィ教師に謝罪をします、と言うロベルトと皮肉の言い合いをしながらたどり着いた教室内に教師の姿はなく、黒板に描かれていた『自習』と言う文字にシアルシアは内心首をかしげた。ロベルトは廊下で待機をしている。何かあつたら踏み込めるように、始終周囲を警戒しているがシアルシアは無駄なことを…と毒づいた。

ちらちらとシアルシアを見るだけで、彼女に対する朝の挨拶すらない生徒たちはシアルシアに道がある。

シアルシアにあまり関わりたくないようだ。

「ちょ！」

遠巻きに見ていた生徒たちも、『都』のハーデルス家の娘の対応にざわめきを隠せない。

「貴女、メルソフィ先生が不在だからと言って堂々と遅刻して席に座るなんて！どんな神経をしているの！？」

「メルソフィ先生が居ないのだから私を罰する者はいないはずだ。だから席に着いだけだが？それとも、お前が私を罰するのか？」

「そうですね。私は今日からこの教室のルームリーダーとして任されています。教室のまとめ役と言う退任をを任された以上、貴女の遅刻をみすみす見逃すわけにはいきません」

いつの間にか決まってるらしい、ルームリーダーはセシリアが任命されたらしい。

ルームリーダーとは、教室内の荒事を仕切る生徒のことを言う。というか、まだあんなくだらない『特権階級』の威張り散らしたいがための『係』があったのか、と過去に意識を向ける。

あまり良い思い出の無い、シアルシアⅡシルヴァルトのセント・リエル時代の為に、眉間にしわを入れた。

セシリアは胸をはりながら己が任されたことに『当たり前のことだ』と誇らしく思っているようだが、シアルシアからしてみれば、権力のある子供が同等の子供に己の権力（存在）を誇示従っているように見える。

馬鹿馬鹿しい。

（…………それは、私か…）

自嘲の笑みを僅かに浮かべ、誰の目にもとまらない瞬く間の間に消し、シアルシアはふと首をかしげる。

昨日のメルソフィの案内ではリーダーは未決定だったはず。

「なんでお前がリーダーなんだ？」

「私の名前は、セシリア」

「でっかいリボン女」

「つつつ！！！！」

教室の温度が僅かに下がる。

周囲の生徒が、じりじりと黒板側・ドア側へと避難している様が見える。セシリアは背を向けているために見えないが、それ以前に怒りで顔が真っ赤だ。

そんな二人の間に、滑り込むように一人の男子生徒が入る。

「まあまあ、ハーデルスさん落ち着いて。おはよう、センレーア

さん。センレーアさんが来る前に多数決でリーダーが決まったんだ」
困った顔であるが、腹の底からは面白くて仕方ないと言った雰囲気
を醸している少年・ギルフ。

シアルシアは、こいつは…と、いぶかしんだ視線を向けた。

同様にセシリアも、「……貴方は…」と声を漏らす。

彼は落ち着いてと言セシリアに告げた。

「センレーアさん、ハーデルスさんをからかうのはやめた方がいい
よ。彼女は、多数決で決まったリーダーなんだから」

「……………」

うんうんと一人頷くギルフ。

「ハーデルスさん、君は少し落ち着いた方がいい」

「っな！」

「ほらほら、落ち着くんた。たいたい、君は『リーダー』なのに彼
女に朝の挨拶もしてないだろう？」

「……………それは……」

「頼られる存在のリーダーが、朝の挨拶を忘れるのはいけないと思
うんだよね。あと、センレーアさんも。挨拶をされたら、挨拶を返
すって」

ギルフの言葉を遮って、ガタンと音を立ててシアルシアが席を立つ。

「あれ、怒っちゃった？」

「別に、怒ってはいない。ギルフ、と言ったな」

「あ、覚えててくれたんだね」

「それはどこかの国の『道徳』か？」

「？ ああ、挨拶を返すってこと？常識だと思っよ。常識」

ぱたぱたと手を振ってへらへらと笑うギルフに、常識…とシアルシ
アはつぶやく。そして、心の中で人の悪い笑みを浮かべる。まず、
腹に何かを持っていそうな少年に常識と言われると、なんだか面白
くない。

そして、突っかかって来たりボン（セシリア）も気に喰わない。

なので、満面の笑みを向け、

「え？」

「おはようございます、ギルフ・レイザス君」

そう挨拶をした。

そこにいたのは、化粧を施した可愛らしい女の子で、度肝を抜かれたギルフは、え？あ、うん、おはようございます…とか細かい声で返した。

「そうですよね。『常識』ですよ、あいさつは。『常識』なのに、いきなり突っかかってきたリボンが大好きなリボン好きっ子のセシリアさんは、『常識』知らずってことですね。ギルフ君って以外に言葉が辛辣なんですね、『遠回し』に！！！！」

うふふふつと微笑むシアルシア。

これを四人の騎士が見たら、目を押さえてかがみこんだらう。

気色悪いと…！

けれど、この場にいたのはシアルシアを昨日知った生徒たち。気色悪さはともかくとして、言葉に血の気が下がる思いだった。

間に入ったギルフすら、真っ青だ。

もちろん、シアルシアの言ったことを思ってたわけではない。

ただ、ギルフは二人のやり取りは個人的には面白かったがこのままだとセシリアが爆発しそうで（まあそれも面白いのだが）止めに入っただけだ。

他の生徒たちへの火の粉が行かないようにと　もちろん、第一は自分だ。

これで、覚えめでたく、ハーデルス家の娘・セシリアと話が出るようになれば…なーんて、軽く考えていたのだが…。

常識だの遠回しだのを、強調したシアルシアの言葉はそんなギルフの甘い考えを木っ端微塵とした。

「だ、誰もそんなこと言っていない!」

「……………」

顔を陰しくしたセシリアは、ギルフを睨みつけ、

「そうですね。私が『世間知らず』で『常識』がなかったようですわ。ご忠告痛み入ります、ギルフさん。あと、貴女、遅刻は私の方からメルソフィ先生に報告させていただきます。直接、先生より指導があります。さて、みなさん!お騒がせして申し訳ございません。一時間目は自習です。自分の興味のある教科の教科書を読みましょう」

パンパンと手を鳴らし、二人の少女がセシリアに駆け寄った。

彼女の取り巻きらしい。その二人が、何か言葉を告げセシリアが数度頷く。

真っ白になったギルフを横目に、

「さて、寝るか」

シアルシアは、そのまま机の上に突っ伏した。

彼と彼女とたぶん複雑な事情 〵〵〵

ロベルトは呆れを通り越して、笑っていた。心の中で。
教室でのやり取りを廊下で聞いていたのだ。

（自分からどうして柵を作って相手を入れようとしななんだ）

この一件でさらにシアルシアに生徒が寄り付かなくなっただろう。
当人にとっては、それが望みでわざとやったのかもしれないことなのだが…。

賢者を探すと言う事を目的とし、セント・リリエルにやってきた事を忘れてはいないが用意された環境になじむつもりは一切ない。
態度でそう告げている。

けれど、あからさま過ぎてどう反応を返していいのかわからない。

（…周囲^{まわり}に壁を作って…本当に、見つかるのか…？）

次代の賢者が…。

（雲の流れが速い…）

シアルシアはぼうつと窓ガラス越しの青空を見ていた。
今は、色素の授業だ。

あまり興味のある魔法分野ではないためシアルシアは壇上に立つ眼

鏡をかけた（やや髪の薄い）教師の講義を右から左へと聞きながしていた。

初日の授業にしては、内容は濃く、担当教師の言葉を聞き逃さないよう必死な生徒をちらりと横目で見る。

（色素…か…）

魔法を扱うもので、必ず通る問題が一つある。

一般的な色素のうち、一色を己の『色』とする。

色素の色は、マナの色として定着し魔法の属性の方向を決める。

たとえば、赤色ならば『火』。

青色ならば、『氷』。

水色ならば、『風』。

茶色ならば、『大地』。

黄色ならば、『雷』。

紫ならば、『闇』。

緑ならば、『樹』。

魔法の一般的な属性はこの七つに絞られている。

「ア…センレーア！」

ぱんつと教壇を叩く眼鏡をかけた担当教師。

シアルシアは教師に目を向け、

「なにか？」

涼しい顔で言葉を返す。教師は苦い顔つきで、黒板に文字を書き、

「……これを解きなさい」

そうシアルシアに告げる。

「は？」

書かれた文字は、教師が今講義していた内容の問題だろう。

「黄金ならば、『光』、白ならば、『無』。白金色の二色は『聖』」

一般的な七属性以外の属性の融合属性の内の最も、人が『持ちえない』属性。

それとは何か？

そう書かれている黒板の答えを告げる。

「…そうだ」

さらに苦い顔をした。

「この黄金を持っていた歴史的人物は、ロマーシャ村の魔法使い《ローウ》マルーシャ。歴史的に彼女がこの力で大陸のマナを静め、『賢者』の中では『大賢者』とされている人物だ。そして、白を持っていた人物は、アルガセスのロゼウルス。歴史的、狂魔法使い《ル・ローウ》。では、センレーア、白金を持っていた人物は？」

「……………」

千年以上前の歴史的人物を述べよ、と告げる教師にシアルシアは露骨に顔をゆがめた。

「わからないのか？センレーア？」

生徒たちがちらりとシアルシアを見る。

ギルフは顔は笑ってはいないが、目は笑っていた。今朝の出来事で憤っていた気持ち、教師に当てられているシアルシアに溜飲を下げたのだろう。

いいざまだ。とても思っているのだろう。

「ファルシエーラ」

喉が、からからに乾いているのか、かすれた声でシアルシアは言葉を出した。

「ファルシェーラ・ローゼンフォルト」

その言葉が喉から出た瞬間、胃が熱くなり、喉を込みあげる吐き気。身体が引き裂かれるかのような、痛みが全身を電撃のように走る。ガタンツと音を立て机を倒し、シアルシアは、胸を押さえる。教室内がざわめき、ざわめきに気がついたロベルトが扉を開けてシアルシアに慌てて駆け寄った。

「シアルシア様!？」

その差しだされた手を見て、音を立てて手を払う。

「大丈夫だ、廊下で待機だろう　ロベルト」

荒い息をつきながら、机を直そうと枠に手をかけると　、

「大丈夫なものか　、肉体が悲鳴を上げているはずだ」

背筋が泡立つ。

ロベルトは振り返り声の主を見、　　剣を抜き放とうとした。

(…っな!?)

剣の柄に手をかけただけで、ロベルトの身体の時が止まったかのようにな動くことが出来なかった。ぞくりと背筋に悪寒が走る。

「騒ぐな　騎士」

男は魔法使いが好んで着る衣装ローブに身を包み、手には腕の長さ程の杖が握られていた。

杖の先端には、赤い宝玉が煌めいていた。

「ファルシェーラ・ローゼンフォルト…、その名はその身に辛かるう……シアルシア・センレーア」

黒の瞳がシアルシアを見下ろす。

ざわめく教室内。

突然現れた、長い黒髪を一括りにした若い魔法使いに教師ともども驚きを隠せない。

「君は一体何だね!？」

教師が眼鏡の弦を弄りながら声を上げると、

「失礼。ゼーク教師。少しばかり遅れてしまい、こんな時間になつてしまったのでね、教師メルソフィに変わり、この教室を担当となつたベルディウスだ」

ざわめきがさらに大きくなり、そして、

「ひつつぎ」

.....! !

喉が張り裂けんばかりに、シアルシアは絶叫し、窓枠に手をかけた。ぎよっとしたロベルトはシアルシアに手を伸ばしかけたが、僅かの差でシアルシアの手を捕えることが出来なかった。そして、ロベル

トの伸ばした指先　その先にベルディウスが居た。

いつの間にか、ロベルトの脇をすり抜け三階下へと飛び降りようとしていたシアルシアの腰に腕を回して今にも飛び降りようとしていたシアルシアを止めた。

「空を飛べも、浮かべもしない癖に、窓から落ちたら軽傷では済まないぞ」

「ぎゃー――――――――――――――――――――――――――――――」

耳元に息を吹っかけるように囁く魔法使いに、さらに絶叫し、

「話せ！変態！―――なんで貴様がここにいる！―――なんで動けるんだ！―――！」

「私はお前とは違う『魔法使い』だ。『シアルシア』、お前の想像の外に居る存在だ」

全身鳥肌を立てるシアルシアは力いっぱい窓の外に手を伸ばすが、べりつと窓枠から引きはがされ、気がついたら横向きに抱えられている。

お姫様抱っこというやつだ。

既に、シアルシアの意識はうつろだ。

全身蒼白になって、何かをつぶやいている。

「さて、ゼーク教師、授業を続けてくれ」

「……な、なにをやっているのかね、君は」

抱きかかえたまま教室を出て行こうとするベルディウスに教師・ゼークは教室内の生徒の心の声を代弁した。

「顔色の悪い、我が花嫁を医務室に――」
「行かせるか！――！」

シャッと音を立てて剣が抜かれた。

「ほう…、…たかが騎士の分際で私のに敵うと？」

喉を鳴らし、ベルディウスは笑う。と、『ゴッ』とにぶい音が響く。彼の顎をシアルシアが右腕でアッパ―したのだ。舌を髪はしなかったが、あまりの衝撃にシアルシアを抱きかかえたまま数歩後ろに下がる。

「触るな変態！！！！ド変態が！！！！」

拳を突き上げたシアルシアがベルディウスの腕から飛び降り上段蹴りを繰り出した。

顎と似たような『ドっ』とにぶい音を立てて、ベルディウスの脇腹に綺麗に決まる。

「……………っ」

「お互い、身体は不完全だってことだろう…！！こんの！！爬虫類が！！！！」

ロベルトが剣を抜いたために生徒たちは黒板側へと避難し、その為に主の居なくなった椅子と机がシアルシアの横にはあった。

椅子の背もたれを掴み上げ、ベルディウスに力いっぱい投げる。

難なくよけるベルディウスに、怒りを募らせ机や鞆（生徒たちの）を手当たり次第に投げる。

生徒たちは突然の事に悲鳴を上げる。そして剣を抜き放ったまま、手持無沙汰になってしまったロベルトは呆然と二人のやり取りを見ている。

「いい加減にしてください！！！！！！！！！！」

その二人の攻防を止める怒声が、教室内に響く。

セシリアが大きなりボンを揺らし、

「痴話喧嘩なら、後ほど時間をかけてやってください！貴方、ベルディウスとおっしゃいましたね、教師でありながら授業を邪魔し、あまつさえ」

「喚くな、小娘」

「なっ！？」

「私は別に教師になりたくてこの地に来たのではない 目的の為に教師と言う地位を与えられたただだ。さて、『シアルシア』、何だと思う？」

セシリアの言葉を喘ぎり、シアルシアに問う。

「……………」

ヘルディウスの手につつロッド 見た目はどこにでもある杖だが、あの宝玉は曲者だ。『魔法使い《ローウ》』としての感が告げる。

（…………、逃げるにしても、空を飛ぶ魔法を行使するだけの力がない……………というか制御できない…………）

じりじりと後退したシアルシアはふと、後方で剣を抜き、痛い顔をしている（……………というかベルディウスとシアルシアのやり取りがどうみても痴話げんか過ぎて）ロベルトの顔を見て、はっと気づく。
逃げるようにロベルトの背に回り、

「私、この人と恋人だから 貴方の花嫁にはなれません！-」

がしつとロベルトの腕に腕をからませ、ベルディウスにそう告げる。
ざわりと生徒たちがざわめく。微かに、否定的な声と肯定的な声が聞こえる。

噂好きな女子生徒だろう。

「……………」

ベルディウスの視線が陰しく、そして殺気が混じるがシアルシアは

気にもせずに告げる。

「一年も時間があれば、『新しい恋』は生まれるんじゃないかしら？」

バチンと、空気が爆ぜる。

ロッドの宝玉から炎が上がり、

「なるほど、…では、その騎士を 滅ぼそう」

「出来ないことは、言わない方がいいわよ ベル」

バッチーンとウィンをし、ロベルトの背に回り、『ロベルト』を楯とする。ぎよつとしたロベルトが何かを叫ぼうとしたところ、シアルシアが告げる。

「赤竜の血珠^{ほつじゆ}くらい、余裕で防ぐさ、お前なら！」

「なっ何言つてんだ、この野郎^{アム}——————」

ロベルトの絶叫と同時に炎が爆発し、生徒たちが悲鳴を上げて教室から逃げて行く。

セシリアが何かを叫んだが、ギルフがセシリアの腕を掴み引きずるように教室から逃げた。

窓ガラスが激しく割れ、窓側一面が炎に包まれる。

「リ・リフレル」

さあつと炎が散る。

黄緑の 新緑色の光が炎を花卉のように細かくする。

「……………」

無傷のロベルトと咳き込むシアルシア。若干、シアルシアの衣服が焦げているが、ロベルトのお陰で無事にだ。だが、教室内は無事ではない。

壁に編みこまれ、書きこまれた結界が反応したはずなのに　　廃墟と化している。

机の木の部分は消し済みとなり、鉄は溶けて形を歪ませている。

そんな中、無傷なのだ　　ロベルトは。

顔をゆがめる、ベルディウスにロベルトは乾いた笑いを浮かべる。

「…反魔力者、が、ここまでとはな…。そして、力を失っていても『魔法』を流すのは巧いらしいな」

「《解除》は苦手でも、得意でもない。私の完璧で完全なる『力』の在るべきあり方の一つだ」

シアルシアは制服の裾に付け垂れたロッドを収める革ひもを縛りなおしながら、二の腕ほどの長さのロッドの先をベルディウスに向ける。

「何のつもりだ　ベルディウス」

歯を食いしばり、シアルシアがつぶやく。

ロベルトは剣を握る手に力入れた。あの時の　黒の竜。

完全なる人の姿で現れたのだ。シアルシアに対する執着はともかくとして、現状を打開する方法の素早く考える。

シアルシアの安全を確保　。そして、　。

「全く…、着任早々騒ぎを起こして。さすが、ベルディウス教師じゃの」

ほっほ、としわがれた笑い声が教室内に響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2065t/>

邪神竜と賢者の楯

2011年11月2日16時15分発行